令和８年８月１日

令和７年度　特別の教育課程編成の実施状況について

学校法人名・学校名	評価結果の公表
学校法人聖母被昇天学院 アサンプション国際高等学校	https://www.assumption.ed.jp/introduction/disclosure/

１．特別の教育課程の内容

（１）特別の教育課程の概要

英語力を重点的に強化するコース「English Course」を設置する。
英語イマージョン教育によりネイティブと自由にコミュニケーションを取れる英語力を養成し、アクティブラーニングにも取り組む。

（２）必要となる教育課程の基準の特例

平成29年4月に英語イマージョン教育を標榜したイングリッシュコースを設置するにあたり、教育課程の基準の特例を次のとおりとする。
英語、数学、理科、総合的な学習の時間について、英語を含む指導により授業を行う。具体的には現行の学習指導要領に定める各学年・教科等の標準単位数を堅持しつつ、3年間における総単位数の約 50%について、英語を含む指導とする（教育課程全体は添付の教育課程表参照）。

（３）学校又は地域の特色を生かした特別の教育課程を編成して教育を実施する必要性

学校設置地域である大阪府箕面市は多文化交流を重んじ、近隣の大阪大学外国語学部をはじめとする多くの研究機関が設置され、児童に対する英語初等教育の実現が求められている。さらに市内を中心とする在住児童に対しても幼少期から外国語を自由に駆使し、グローバルな視野をもつ国際人として養成することが求められている。それらの要請に応えるため、英語に重点を置いた教育を行い、地域に根付いている国際交流環境の中で、さまざまな背景を持った児童が啓発し理解し合う、さらなる異文化教育の拠点となる環境を構築すべく特別の教育課程を編成する。

また、本学院においても小・中・高１２年間の英語教育（イマージョン教育）を通して国際性豊かな生徒を育んでいる。

（４）法令上の教育の目標等との関係

ア　教育基本法及び学校教育法における教育の目標に関する規定との関係

英語教育に重点を置く一方で、懸念される日本語力の習得および日本人としての意識涵養には十分な対策を講じる。具体的には国語科の強化と国語能力養成の重要性を認識し、十分な指導を行っていく。

イ　学習指導要領に定める内容事項が特別の教育課程において適切に取り扱われていること

日本語による指導および英語を含む指導の双方について、教員免許を有する教員が検定教科書に準拠した教育を行う。

また生徒に対しては、学習指導要領に定める内容事項の到達度について検証するために、適宜、学習到達度のチェックを行う。懸念が生じた場合は、速やかに学習内容の点検、改善を行う。

ウ　学習指導要領に定める内容事項を指導するための総授業時数が特別の教育課程において確保されていること

現行学習指導要領に定める各学年・教科の単位数の標準を確保することを前提に教育課程を編成しており、卒業までに修得させる単位数を上回る 89～105 単位を確保する。

（５）児童又は生徒の教育上適切な配慮及び保護者への配慮

ア　児童又は生徒の発達の段階並びに各教科等の内容の系統性及び体系性への配慮

アサンプション国際高等学校は英語教育・国際理解教育・異文化教育等には創立以来の実績を持ち、高等学校段階で涵養した英語力を持続発展させ、海外の大学等の進学の土壌を持ちあわせている。グローバル人材育成を視野に入れたＳＧＵや海外大学との高大連携も強化しながら、系統的、体系的な学習が可能とする十分な配慮を行う。

イ　保護者の経済的負担への配慮その他の義務教育における機会均等の観点からの適切な配慮（小学校，中学校，中等教育学校の前期課程又は特別支援学校の小学部若しくは中学部において特別の教育課程を編成・実施する場合のみ記載）

記載の必要なし

ウ　児童又は生徒の教育課程特例校への転出入に対する配慮

転入に関しては基本的には帰国生徒をはじめとする英語学習環境が充実している中で教育された生徒を対象とし、英語教育に特化した教育課程は日本語が堪能でない生徒に対して、順応しやすい配慮がされていると考える。日本語と英語を自由に駆使する生徒の養成を目指すため、日本語教育にも注力し、生徒が転出する際にも、支障がないよう十分に配慮する。

エ　その他特例の実施に当たって必要と考えられる配慮等

今後の運用において、必要に応じた配慮を柔軟に行う。

（６）特例の適用開始日

平成 29 年 4 月 1 日

（７）取組の期間

学習指導要領は原則 10 年毎に改訂されることになっているが、平成 29 年 4 月から本学の行う教育課程の趣旨が、学習指導要領改訂時に盛り込まれるまで。

（８）計画の実施状況の把握・検証及び文部科学省への報告

計画の実施状況、効果、課題と今後の取り組み等について、文部科学省に報告し、毎年度の実施状況について本学のウェブサイトで公開する。

２．特別の教育課程の実施状況に関する把握・検証結果

（１）特別の教育課程編成・実施計画に基づく教育の実施状況

〔　・計画通り実施できている　〕

（２）保護者及び地域住民その他関係に対する情報提供の状況

〔　・計画通り実施できている　〕

（３）生徒による評価

生徒に対しては各学期に 1 度、授業アンケートという形で授業担当者から生徒に直接授業アンケートを実施し、日々の改善に生かしている。また年に 1 回、イングリッシュコースでの学びについてのアンケートをイマージョン委員会が実施し、コース全体の改善に生かしている。　イングリッシュコースの高校生にアンケート調査を行い、満足度、興味関心、力量向上の実感、将来への展望について測定をした。

①イングリッシュ・イマージョンプログラムはあなたの期待に応えていますか？

期待以上	期待通り	ほとんど 期待通り	期待にほとんど 応えていない	期待に 応えていない
２０％	４２％	３５％	３％	０％

②前の学校に比べて英語を使うことが多いですか？

ずっと多い	多く使う	ほぼ同じ	少ない	はるかに少ない
７５％	２０％	５％	０％	０％

③英語を勉強したい生徒にイングリッシュコースを勧めたいですか？

Yes	No
９３％	７％

④イングリッシュ・イマージョンプログラムにどの程度満足していますか？

非常に満足	満足	ふつう	少し満足	満足していない
２５％	４８％	２３％	１％	３％

①の「イマージョンプログラムは期待通りか」との質問について「ほとんど期待通り」も含めると 97%の生徒が「期待通り」と回答している。また②の英語の使用頻度について、95%の生徒が「多く使うようになった」と回答している。④のイマージョンプログラムも含む満足度を問うと、「非常に満足」「満足」と回答した生徒は 73%となり満足度が高いと言える。③の「英語を勉強したい生徒にイングリッシュコースを勧めるか」という質問には 93%の生徒が勧めると回答し、この点からも満足している様子がわかる。

（４）教職員による評価

イマージョン授業実施に当たっては、日本語を母語とする教員とペアを組み、授業について事前・事後に打ち合わせを行い、評価・改善を繰り返し行っている。またイマージョン授業を担当する教員を統括するイマージョン委員会（学校長も所属）を設置し、週１回の会議で適宜評価を行っている。イマージョン担当教員からは、授業内の説明、教材でも英語を用い、また生徒の発言・発表・レポートでも英語で行うことを義務付けているため、生徒の英語使用頻度が高いこと、そのことによって意欲ある生徒の英語力が向上していることの指摘がある。また外国語を母国語とする教員の授業は、ディスカッション、レポート課題、アクティブな学びなど授業展開においても参考になるとの評価を得ている。

（５）保護者及び学校関係者による評価

年間２回以上の授業参観、外来者への授業公開など、積極的に授業公開を行い、学校評価アンケートでもフィードバックをいただいている。

学校評価アンケートのイングリッシュコース保護者の評価では回答者の 70%が「丁寧でわかりやすい授業に努めている」の質問について肯定的評価をしていた。また自由記述からも例年どおり「英語（特に英会話、リスニング）の力がついたように思う」「英語はネイティブよりも、世界共通語としてノンネイティブと話す機会の方が多いので、それを意識した教諭が配置されているのが良い」といった肯定的な意見が見られた。

海外大学進学に向けての試験対策（IELTS・TOEFL・SAT など）の強化や推薦文対策などをしてほしいとの要望もあった。

３．実施の効果および課題

（１）特別の教育課程の編成・実施により達成を目指している学校の教育目標との関係

前項の生徒評価で見られるように、本校の英語イマージョン教育についての生徒の満足度は高く、かつコミュニケーション力向上にもつながっているとの実感も生徒自身が持っている。また英語への興味・関心も高まり、将来の進路に英語を使う仕事を希望する生徒の割合も高い。

また帰国生生徒も増加し、海外修学旅行（ポーランド）の実施や海外留学プログラムの増加も含めて海外経験を有する生徒が増え、目標とする「地域に根付いている国際交流環境の中で、さまざまな背景を持った児童が啓発し理解し合う、さらなる異文化教育の拠点となる」環境に近づきつつあると考える。課題としては英語による授業への期待から帰国生生徒が増加することで、日本語能力のサポートが必要な生徒へのケアの必要性も出てきている。

（２）法令上の教育の目標等との関係

学習内容については日本の学習指導要領に沿った内容を英語で行うこととしており、評価においても学習指導要領の到達目標を意識しながら確認をしている。授業は教科書の内容に精通した日本語を母語とする教員と英語の能力に長けた外国語を母語とする教員の TT で授業の企画を行っており、両者が事前・事後に相談することで内容を確認している。

課題としては上記趣旨に沿ったテキストが市販されていないため、教科担当者がスライドやプリントなどの独自に教材を制作する必要があるため負担が大きくなっている。

４．課題改善のための取り組みの方向性

本校で実践しているイマージョン教育に対する生徒の満足度は高く、力量向上にもつながっている一方、帰国生生徒の増加や英語によるテキストの制作負担等課題も出ている。

後者については、日本語・外国語教員の両者の協力による本校独自の教材の制作を継続し毎年更新を行うことで、教材をレベルアップさせていきたい。また授業方法の交流・研修会の実施など、教員間で実践を共有していく仕組みを構築したい。

継続してこれら教育目標達成のための取り組みを向上できるよう、今後も実行・評価・改善を行いながら学校全体で取り組んでいく。